日本語 ⑤

もくじ

みんなで　なかよく
一　教室の　そうじ
二　相談会
三　花だん作り
いもうと
話し合いを　する　ときは

話を　する　ときは
おもしろい　ことば
ぼくたちの　村
一　パイネイラの　下で
二　大切な　村の　もの
三　村の　入植祭
四　村を　作った　人
ピノキオ
くわしく　見て
いもばんの　作り方
げんこう用紙の　書き方
野ぎく
文を　書く　ときは
書いた　あとでは
「母の　日」の　相談
日記と　手紙
一　日記
二　アマゾンだより
三　はるえさんの　返事
アマゾンの　魚
サン・パウロ見物
ハンデイラの　話
つるの　あやおり
おもな　ことば
今までに　ならった　かんじ
あたらしい　かんじ
先生と父母へ

(004.jpg)

みんなで　なかよく

一　教室の　そうじ

新しい　学年が　始まりました。

先生が、

「みんなで、教室の　そうじ当番を　きめよう。」

と　言いました。ぼくたちは、めいめい　自分の

考えを　言う　ことに　しました。

男の　生徒と　女の　生徒に　分けて、組を

作ろうと　言う　人が　ありました。

男と　女の　生徒を　まぜて、組を　作ろうと

言う　人　も　ありました。

一組の　人数も、五人　八人　十人と　考えが

まちまち　です。相談して、男女の　生徒　六人

で、一組を　作る　ことに　きめました。

先生が、

「なるべく 同じ 方角から 来る 人で、組を 作ると いいだろう。」

と 言いました。

男の 人の 多い 組や、女の 人の 多い 組も できましたが、いやだと 言う 人は ありませんでした。

さっそく、きょうから そうじを する ことに しました。どの 組から 始めるか、くじ引きで 順番をきめました。

（新漢字 教室 新始当番徒分数相談男女角順）

みんなで　なかよく

一　教室の　そうじ

新しい　学年が　始まりました。

先生が、

「みんなで、教室の　そうじ当番を　きめよう。」

と　言いました。ぼくたちは、めいめい　自分の　考えを　言う　ことに　しました。

男の　生徒と　女の　生徒に　分けて、組を　作ろうと　言う　人が　ありました。

男と　女の　生徒を　まぜて、組を　作ろうと　言う　人も　ありました。

一組の　人数も、五人　八人　十人と　考えが　まちまちです。相談して、男女の　生徒　六人で、一組を　作る　ことに　きめました。

先生が、

「なるべく、同じ　方角から　来る　人で、組を　作ると　いいだろう。」

と　言いました。

男の　人の　多い　組や、女の　人の　多い　組も　できましたが、いやだと　言う　人は　ありませんでした。

さっそく、きょうから　そうじを　する　ことに　しました。どの　組から　始めるか、くじ引きで　順番を　きめま

(005. jpg)

ぼくたちの　組が一番に　当たりました。ぼくの　組は、池田さん、山下君、本田君、宮川さん、北村さんと　ぼくの六人です。

先生は、

「なかなか　うまい　組み合わせが　できた。これからは何を　するにも、みんなで　相談して　きめようね。」

と　言いました。みんなは　にこにこして、顔を　見合わせました。

小池君が、

「先生、ぼく　花だんを　作れば　いいと　思います。」

と　言うと、みんなが、

「さんせい、さんせい。」

と　言いました。先生が、

「それでは、あした　相談会を　しよう。」

と　言ったので、みんなは　大よろこびで　パチパチと　手を　たたきました。

みんなが　かえってから、ぼくたち　六人は、そうじを始めました。

男の　人は、重い　物を　動かしたり、高い　所の　そうじを　しました。女の　人は、ゆかを　はいたり、つくえの上を　ふいたりしました。

（新漢字　君　宮　顔　花　重　物　物）

きれいに　そうじが　すみました。

先生が、

「よく　できたね。ごくろうさま。」

と　言って、ほめて　くれました。

ぼくたちは、そうじ道具を　きちんと　かたづけました。

こんど　作る　花だんの　ことを

話しながら　かえりました。

二　相談会

先生「きょうは、花だんを　作る　ことを　相談しょう。ぎ長は　森君、ふくぎ長は　池田さんが　やって　ごらん。」

みんなは、つくえを　まるい　形に　ならべかえました。森君と池田さんは、黒板の　前の　せきに　つきました。

ぎ長「これから、花だんを　作る　ことに　ついて　相談会を　始めます。

さいしょに、場所の　ことを　きめたいと　思います。」

「はい」「はい」と、手を　上げる　人が　たくさん　いました。

ぎ長「すず木君。」

（新漢字　道　具　長　板）

(007. JPG)

すず木「げんかんの　前に　作ったら　いいと　思います。

ぎ長「それは　いい　考えです。」

「はい」と　宮川さんが、元気な　声で　手を　上げました。

ぎ長「宮川さん。」

宮川「うらにわの　南がわが　あいて　いますから、あそこにも　花だんを　作ったら　いいと　思います。」

「さんせい」と、大ぜいが　言いました。

ぎ長「それでは、げんかんの　前と　うらにわの　南がわに、花だんを　作る　ことに　します。

次に、植える　ものを　きめたいと　思います。

山下「はい。」

ぎ長「山下君。」

山下「めいめい、すきな　花を　持って　きて　植えたらいいと　思います。」

山下君が　そう　言うと、みんなが　ガヤガヤ　話し出しました。

ぎ長は、「かってに　話を　しないで　手を　あげて　ください。」

と　注意しました。

山田「ぎ長。」

ぎ長「山田君。」

山田「げんかんの　組と　うらにわの　組を　作って、その組が、すきな　花を　植えたら　いいと　思います。」

ぎ長「上田さんは　どう　思いますか。」

（新漢字　植　注　意）

（008.JPG）

上田「はい。山田きんの　考えは　いいと　思います。でも、きょうそうに　なると　こまります。」

ぎ長は、ふくぎ長と、上田さんの　考えに　ついて　相談しました。

ふくぎ長「それでは、きょうそうしないで　いろいろな　花を　植えるには　どうしたら　いいでしょう。」

ぎ長「北村さん。」

北村「組長を　えらんで、その　組長が　相談して　きめたら　いいと　思います。」

全員「さんせい。」

ぎ長「では　植える　ものは、組長が　相談して、組ごとに　すきな　ものを　植える　ことに　します。」

山口「ぎ長。」

ぎ長「山口さん。」

山口「組は　どう　やって　きめるのですか。」

ぎ長「はい。組分けは　どう　やったら　いいでしょう。」

竹村「はい。」

ぎ長「竹村君。」

竹村「月曜・火曜・水曜の　そうじ当番の　人を　一組、木曜・金曜・土曜の　そうじ当番の　人を　二組に　して、場所は　くじ引きが　いいと　思います。」

ぎ長「今の　竹村君の　考えは　どうですか。」

全員「さんせい。」

（新漢字　員　曜）

ぎ長「では、そう　きめます。いつから　始めますか。」

みんなは、小さい　声で　話し合って　いました。

ぎ長「山下君、大きな　声で　言って　ください。」

山下「きょうから　やりたいと　思います。」

だれかが「道具が　ないから　だめだわ。」と　言いました。

ぎ長「きょうは　道具が　ありません。土曜日の　午後から

は　どうですか。」

全員「さんせい。」

ぎ長「では、今　きまった　ことを、池田さん、黒板に　書

いて　ください。」

ふくぎ長「はい。」

ふくぎ長の　池田さんは

きまった　ことを　黒板に
書きました。
全員で　それを　読みま
した。
ぎ長「みなさん、土曜
日には　道具を
わすれないで
ください。これ
で　相談会を
終わります。」
（新漢字　午　後　終

森「先生、相
談会が
終わりま

した。」

先生「ごくろうさま。きょうの相談会は なかなか よく できたね。

ぎ長も ふくざ長も うまく まとめて いた。それから、考えが どんどん 出た ことは たいへん よからたが、ガヤガヤ 言う 人が 少し あったね。考えが あったら、手を 上げて ぎ長の ゆるしを 受けてから、はっきり 言うように しよう。この 次は、ほかの 人に ぎ長を やって もらいましょう。」

（新漢字 受）

(011. JPG)

三　花だん作り

きょうは　土曜日です。

みんな　昼ごはんを　すませてから、学校に　集まりました。めいめい　自分の　うちから、道具や　花の　なえを　持って　来ました。

この　間の　相談会で　きめたように、ぼくたちは　二組に　わかれて、げんかんの　前と　うらにわとで、花だんを　作り始めました。

ぼくは　げんかんの　方の　組で、組長は　森君です。山下君、本田君、池田さんたちも　ぼくの　組です。

はじめに、花だんを　作る　所を　かたづけました。

エンシャーダで　草を　けずる　者、ごみや　石ころを　集める　者、それを　ごみすて場に　はこぶ　者も　います。

ぼくと　山下君と　本田君

は、エンシャドンと　アパーで　土を　ほり返して　いきました。

見ると、みんな　顔を　まっかに　して、あせを　ふきながら　はたらいて　います。

「やあ、ごくろう　ごくろう。みんな　一生けんめいだな。」

(新漢字　昼　集　間　者)

(012. JPG)

と　言う　声が　したので　ふり向くと、大林先生が　立って　いらっしゃいました。

「先生、上が　かたくて　たいへんです。」

と、ぼくが　言うと、

「そうだろう。こうたいで　やりなさい。」

と　おっしゃいました。すると　すぐ　山田君が、
「すず木君　かわろう。」
と　言いました。ぼくは、
「まだ　いいよ。」
と　言って、いきおいよく　土を　ほり返して　いきました。
先生は、
「けがを　しないように　注意するんだよ
と　言って、うらにわの　方へ　行かれました。うらにわの組も　がんばって　いるらしく、物音や　声が　ひっきりなしに　聞こえます。
土ならしが　すんでから　少し　休みました。休みながら、どこに　何を　植えるか　みんなで　相談しました。
つつじ・ばら・あじさいなどは　先に　植えました。それから、ダリヤ・きく・けいとう・ガーベラ・百日草・コスモス・クラボ・サルビヤ・ベゴニヤ・まつばぼたんなどを　植えました。植え終わってから　水を　たくさん　かけて　や

りました。これで　やっと　花だん作りが　終わりました。

（新漢字　草）

（013.ＪＰＧ）

みんなは　あせを　ふくのも　わすれて　きれいに　できた花だんを　見て　いました。

「月曜に　みんなが　見たら　おどろくでしょうね。」

と、山口さんが　言いました。

うらにわの　組は、どうして

いるかと　思って　みんなで　見に

行きました。ちょうど　できあ

がった　ところでした。先生が、

「みんなが　力を　合わせたので

りっぱな　花だんが　できた。」

と　ほめて　くださいました。

いもうと

いもうとが　なくので
だいて　やった。
歌を
うたって　やると
ねむって　しまった。

もう　だいじょうぶ、
そっと　カマに　おいたら
ぱっちり　目を　あけて
わたしを　見た。

（新漢字　歌）

（014.　ＪＰＧ　横書き）

話し合いを　する　ときは

○なかよく　話し合いを　しましょう。

○ひとの　話が　終わらない　うちに、かってに　話し出さないように　しましょう。

○自分ばかり　話を　しないで、ゆずり合って　話しましょう。

○ひとの　話を　よく　聞きましょう。

○話し合いが　まとまるように、助け合って話しましょう。

○話し合って　きめた　ことは、その　とおりに　しましょう。

話を　する　ときは

○順じょよく　話しましょう。

○ただしい　ことばづかいで　話しましょう。

○その　場に　合った　声で　話しましょう。

○だいじな　ところを　おとさないように

話しましょう。

○ 話が 切れて しまわないように 話しましょう。

○ 話の 中に、出て くる 物の ようすや 心持ちが、聞いて いる 人に わかるように 話しましょう。

(新漢字 助 心)

(015. JPG 挿絵あり)

おもしろい ことば

ことばには、同じ 音や 字が 重なって いる ものが たくさん あります。

○ パラパラ 雨が ふり出した。

○ チリンチリン すずが なる。

○ トントン　戸を　たたく

○ ねずみが　ガリガリ　かじる。

○ 汽車が　ゴーゴー　走る。

○ これらは、物音を　あらわした
ことばです。

○ 星が　きらきら　光る。

○ けむりが　もくもく　出る。

○ 風車が　くるくる　回る。

○ ボートが　ゆらゆら　ゆれる。

○ すなが　さらさら　おちる。

○ さるが　するする　木に　のぼる。

これらは、物の、ようすをうつし
た　ことばです。

○ いろいろな　本を　読んだ。

○ にいさんが　どんどん　走った。

○ この　もんだいは　なかなか　むずかしい。

（新漢字　重　星）

(016. JPG)

○　おじさんが　にこにこして　話した。

○　これから　ますます　寒く　なります。

などと　いうのも　あります。

また、同じ　字の　重なった　ことばでは、

○　方々から　人が　集まった。

○　見て　いる　人々は　みんな　わらった。

○　次々に　オニブスに　乗った。

○　一字一字　ていねいに　書いた。

などが　あります。

おもしろい　ことばが　たくさん　あります。

ぼくたちの　村

一　パイネイラの　下で

ぼくたちの　村の　入り口に、大きな　パイネイラが　あります。この　パイネイラの　下に　立つと、村を　見わたす　ことが　できます。

ゆるい　波がたの　おかが、いくつも　重なり合って　遠くまで　つづいて　います。

だいたい、カフェザールや　パストですが、ざっ作地も　あちこちに　あります。

ところどころに、赤い　かわら屋根の　家が　見えます。

村の　中ほどに　見える　大きな　たて物は、学校と　会か

(新漢字　寒　々　乗　波　遠)

(017.JPG)

んと　組合の　そうこです。

今、西の　方で　けむりの　上

がって いるのは れんが工場
です。北がわの マットの そ
ばには、せいざい所も 見えて
います。

この 村は、四十年前 七家
族の 日本人が 作ったのです。
その ころ、この へんは
マットでした。

村を 作った 人たちは、道
を ひらきながら マットの 中
を 進んで いったのです。

木の 下に たてた 小屋に
住み、朝から ばんまで 命がけ
で はたらきました。

木を 切りたおして やき、土
を ほりおこし、畑に して い

ったのです。

年よりや　子どもたちまで、ま

っ黒になって　はたらきつづけま

した。

（新漢字　場　家　族　人　進　住　命　畑）

(018. JPG)

こう　して、だんだん　村が　作られて　いったのです。

村には、今、六十四家族の　人が　住んで　います。ブラジル人と　日本人が　なかよく　くらして　います。日本人の　中には、さいしょに　この　村を　作った　人も　いますが、近ごろ　日本から　来た　人も　います。前には　百家族以上に　なった　ことが　ありました。また　三十家族ぐらいに　へった　ことも　ありました。

村の　入り口に　立って　いる　パイネイラは、いちばんはじめに　村を　作った　人が　植えたのです。

夏には、青い　葉を　大きく　ひろげて、すずしい　かげを作ります。

秋には、えだいっぱい　きれいな　花を　さかせます。

パイネイラは　ぼくたちの　村の　番人です。じっと　村を　守って　きたのです。

むかしは、オンサや　アンタが　のそのそ　歩き回るのも見たでしょう。つらい　ことも　楽しい　ことも　村に　おこった　ことは、みんな　知って　いるでしょう。

パイネイラの　下に　立って　いると、いろいろな　むかし話を　聞かせて　くれるような　気がします。

二　大切な　村の　もの

ぼくたちの　村を、東から　西へ　エストラーダが　通って　います。

（新漢字　以　上　守　薬　切　通）

(019. JPG 挿絵あり)

村の　中ほどに、この　エストラーダを　はさんで　学校や　会かんが　あります。

組合の　そうこや　カッペーラや

四、五けんの　店も　あります。

ぼくたちが、今、勉強して　いる　学校は、三年前に　たてた　もので、村で　いちばん　新しい　たて物です。その　前には、土かべ　サッペ屋根の　学校が　同じ　場所に　あったそうです。

学校の　生徒は　全部で　八十五人です。

先生は　ふたりで、町から　オニブスで　来る　先生と　本田君の　ねえさんです。

会かんは、村の　人たちの　集まりに　使われます。村の　入植

祭の　えんげい会や、月に一回
ぐらい　村に　来る　シネマも、
この　会かんで　やります。
組合の　前には、いつも　カミ
ニョンが　何台も　止まって　い
ます。大きな　そうこから、毎日
たくさんの　品物が　出たり　は
(新漢字　勉　強　部　入　植　祭　回)

(020.JPG)
いったりします。
カッペーラでは、ジア・サントや　日曜日の　朝　ミサが
あります。この　カッペーラの　お祭りには、近くの　村や
町から　大ぜい　人が　集まって　きます。
学校の　うらに　大きな　運動場が　あります。だんだん
広くして、今では　やきゅうも　できます。この　広い　運

動場も、入植祭の　ときには　人で　いっぱいに　なります。ここで　運動会を　するのですが、村中の　人が　集まって一日を　楽しく　すごします。

学校も　会かんも　運動場も、村の　人の　役に　たつ大切な　ものです。

三　村の　入植祭

ぼくたちの　村では、毎年　三月五日に　入植祭を　します。この　日は　村で　いちばん　にぎやかな　日です。

パ　パン、パ　パン。朝　早くから　会かんの　にわで花火を　上げて　います。

ぼくは　急いで　したくを　して、ねえさんと　いっしょに　ミサに　行きました。

カッペーラの　前には、もう　村の　人が　いっぱい　集まって　いました。中に　はいると、ろうそくが　たくさんたてて　ありました。おいのりして　おばうさんの　お話を

聞きました。

（新漢字　祭　運　動　役

（021. JPG ）

ぼくは　山下君と　運動場へ　行きました。そこで　おいわいの　式と　運動会が　あるのです。

青年たちが　一生けんめいに

じゅんびを　して　いました。

しばらく　すると、村の　人が

どんどん、やって　きて　式が

始まりました。

みんなで　ブラジルと　日本の

国歌を　うたいました。それから

会長さん、先生、町から　来た

お客さまが　お話を　しました。

これで　式は　おしまいかと　思ったら　会長さんが　ま

た　だんの　上に　上がりました。そして　何か　お話を
しました。
「大谷こうたろうさんに　記ねん品
を　おくります、」
みんなが　手を　たたくと、大谷さ
んの　おじいさんが　出て　きまし
た。会長さんから　大きな　つつみ
を　もらいました。
おじいさんは　ばてたちの　方へ
も　ていねいに　おじぎを　して
(新漢字　式　歌　客　谷　品)
(022.JPG)
もとの　所へ　もどりました。式が　終わると　すぐ　運動
会が　始まりました。
晴れた　空に　花火が　どんどん　上がりました。

ぼくと　ねえさんは、いろいろな　きょうそうに　出て、たくさん　ごほうびを　いただきました。おかあさんも、買い物きょうそうに　出て　石けんを　もらいました。おかしかったのは、おとうさんたちの　パンくいきょうそうで、見て　いた　人たちは　大わらいしました。

しまいに　青年の　リレーが　ありました。みんな　立ちあがって　おうえんしました。

夜は、会かんで　えんげい会が　ありました。ブラジルの歌や　日本の　おどりや　バレーなどが　ありました。おもしろい　げきも　ありました。みんな　大よろこびです。楽しい　入植祭は、夜　おそくまで　つづきました。

四　村を　作った　人

楽しい　入植祭も　おわりました。

おいわいの　式の　とき　大谷さんの　おじいさんが　会

長さんから　大きな　つつみを　もらいました。

大谷さんの　おじいさんは、学校の　近くに　ひとりぼっちで　住んでいます。　もう　七十八才だそうですが、たいそう　たっしゃです。そして　まっ白な　長い　ひげを　はやして　います。おじいさんは、びっこなので　いつも　つえを　ついて　歩いて　います。

おじいさんは、よく　村の　入り口にある　パイネイラの　下で、村を　ながめて　います。

おじいさんが　大きな　つつみを　もらった　わけを、おとうさんに　たずねて　みました。すると　おとうさんは、次のような　話を　して　くれました。

（新漢字　晴　石　才）

（023.ＪＰＧ）

大谷さんは、四十年前　さいしょに　村を　作った　人で
す。村の　入り口に　ある　パイネイラを　植えたのも
おじいさんです。
おじいさんは、だれよりも　よく
はたらきました。
大きな　カフェザールを　持って
いた　ことも　ありました。
村の　仕事は　なんでも　先に
たって　しました。
おじいさんの　あとから　入植し
た　人は、みんな　おじいさんの
(新漢字　事)
(024.JPG)
世話に　なりました。
ひどい　しもで　カフェが　かれて、村の　人たちが　く

らしに こまった ことが ありました。その とき ようけいの 仕事で 村を 助けたのも おじいさんでした。

会かんや 学校を たてる ために、いちばん はたらいたのも おじいさんでした。

二十年ほど 前の ことです。村に 大きな 山火事がありました。村の 人たちは、みんな 出て 火を けしました。

その とき おじいさんは 左の足に 大けがを してびっこに なりました。それから 後、からだが 弱くなり、仕事も できなく なりました。

おじいさんには むすこが 三人 ありました。ふたりはうちの 仕事を して いましたが、次々に 死んで しまいました。ひとりは、早くから サン・パウロに 出て いました。大学を そつぎょうして 今は 大きな 会社につとめて います。

むすこ ふたりが いなくなってから、うちの 仕事は
よその 人に まかせて、おじいさんは 組合の 仕事を
して いました。その とき、サン・パウロに いる むす
こが むかえに 来ました。しかし、おじいさんは 行きま
せんでした。組合の 仕事も やめて、ひとりで くらしな
(新漢字 世 話 後 弱 死)

(025. JPG)
がら、天気の いい 日には
あちら こちらを 歩いて い
るのです。

おとうさんは、こんな 話を
してから、
「大谷さんは、村の おん人な
んだ。だから みんなで、いた
わって あげて いるんだよ。」

と　言いました。

ピノキオ

○　いたずらピノキオ

ゼベットじいさんは、木切れて
かわいい・あやつり人形を　作っていました。
名まえは　ピノキオです。
両手を　作ると、いきなり　おじ
いさんの　かみの　毛を　引っぱり
ました。両足を　作ると、ひとりで
歩き出し、へや中を　かけ回りました。そして　戸口から　通
りに　と
(新漢字　形　両)
(026. JPG)
び出しました。おじいさんは　おどろいて　追いかけました。

「ピノキオや　まって　くれ。」
糸も　つけて　ない　あやつり人形が、ひとりで　走って
いきます。その　あとから　おじいさんが　追い
かけて　いきます。
町の　人たちは、おもしろがって　わらって　いるばかり
で　つかまえて　くれません。運よく　おまわりさんが　道
の　まん中に　立って　いて　つかまえて　くれました。
おじいさんは　お礼を　言って、うちに　つれて　かえり
ました。

いいか、ピノキオ。これからは、だまって　うちを
び出しては　いけないよ。
「うん、わかったよ。」
「よし　よし。おまえも　あしたから　学校へ　行くんだ。
しっかり　勉強して、りっぱな　子どもに　なるんだよ。」
ゼペットいしいさんは　ぴんぼうでしたから、自分が　着て

いた　上着を売って、学校の　本を　買ってやりました。

○　学校へ　行く　と中で

次の　日、ピノキオは　学校へ　出かけました。

おじいさんに　買って　もらった　本を　たいじそうに　かかえて　いきました。

と中まで　行くと、

(新漢字　追　礼　着)

(027. JPG)

プーカ　プーカ　ドンドンドン、ピッピキ　ピッピキ　ピー。

「おや、おもしろい　楽たいだなあ。」

ピノキオは、学校へ　行く　ことも

わすれて、

「ああ、あの　テントだな。早く　行

って　みよう。」

ピノキオは　走り出しました。きれい

な しばい小屋が あって、さかんに
お客を よんで いました。
ピノキオは 見たくて たまりま
せん。がまんが できなく なったので、
大切な本を売って、しばいの きっぷ
を 買いました。
ぶたいでは、いろいろな 人形たち
が、話を したり ないたり わらっ
たりして、いました。その うち、ぶ
たいの 人形が ピノキオを 見つけ
ました。
「あっ、あそこに なかまが いる。」
「さあ、ピノキオ君 いっしょに お
どろうよ」

(028. JPG)

ピノキオは、ぶたいに　上がって　みんなと　おどりました。
楽屋からも　あやつり人形が　大ぜい　出て　きて、
「わっしょい、わっしょい。」
ピノキオを　かついで　ぶたい中を　歩き回りました。
「これ　これ、しばいを　やめては　いけない。」
人形使いは　みんなを　しかりました。そして、ピノキオに言いました。
「おまえは　学校を　休んで　こんな　所で　あそんで　いては　いけない。早く　おじいさんの　所へ　おかえり。」

○　おもちゃの　国へ

ピノキオは、かえり道で　大ぜいの　子どもを　乗せたきれいな　馬車に　会いました
ぎょ者の　おじいさんが　言いました。
「もし　もし　ばっちゃん、乗りませんか。おもちゃの　国へ　行く　子どもの　馬車ですよ。」
「おもちゃの　国って　どんな　所なの。」
馬車の　上から　子どもたちが　言いました。

「いくら　あそんで　いても　しられない　所だよ。」
「おいしい　ごちそうが　いっぱい　あるよ。」
ちょうど　おなかの　すいて　いた　ピノキオは、馬車に
乗って　しまいました。
　おもちゃの　国には、子どもが　大ぜい　いました。
（新漢字　馬　者）

(029. ＪＰＧ)
　すべり台・ブランコ・まめ自動車・
木馬、あそぶ　ものなら　なんでも
ありました。
「毎日　毎日　ごちそうが　食べられ、
いくら　あそんで　いても　しから
れない。
いい　所へ　来たなあ。」
ピノキオは、おもちゃの　国で　毎日

あそんでばかり いました。

ところが ある 朝の ことです。

ピノキオが かがみを 見ると 大きな ろばの 耳が にょきっと はえて いました。

「いやだよ いやだよ。ろばの 耳なんか。」

かわいそうに、ピノキオは あそんでばかり いる 間に、ろばに なってしまったのです。

○ サーカスに 売られて

ろばに なった ピノキオは、サーカスに 売られて しまいました。

食べものは、草ばかりです。そして、

（新漢字 食）

(030. JPG)

しかられながら　サーカスの　けいこを　しなければ　なりません。

「早く、おじいさんの　所へ　かえりたいなあ。学校へ　行きたいなあ。」

ろばに　なった　ピノキオの　目から、なみだが　ぽろぽろ　おちました。

「さあ、おまえの　出る　番だぞ。」

馬小屋から　ぶたいに　つれ出されました。

ジンタッター　プカプカドン

ジンタッター　プカプカドン

楽たいが　にぎやかです。ろば使いの　むちの　音を　合図に、ろばの　ピノキオは　かけ出しました。火の　わ　を　次々と　くぐりぬけて　いきました。もう　一つで　おしまいと　いう　とき、うしろ足　が　わ　に　引っかかって　しまい

ました。ろば使いは　おこって、ピノキオを　むちで　たたきました。

「こんな　ろばは　役に　たたないから　売って　しまえ。」

とうとう　ろばの　ピノキオは、たいこ屋に　売られて　しまいました。たいこ屋は、ろばの　皮を　はいで　たいこを作るのです。ろばを　ころす　ために、足を　しぼって　海の中に　つきおとしました。しばらくして　たいこ屋は、

「どれ、もう　ろばは　死んだ　ころだ。」

（新漢字　波）

（031.ＪＰＧ）

引き上げて　みると、ろばでは　なくて　あやつり人形でした。

たいこ屋が　おどろいて　いる　間に、ピノキオは　にげ出しました。

そして、おじいさんの　うちに　か

えりました。

○　ほんとうの　子どもに

ピノキオが　かえって　みると　おじいさんが　病気で　ねて　いました。ピノキオの　ことを　心配して　病気に　なったのです。

「おじいさん　ごめんね。ぼく　わるかったよ。これからは　勉強も　するし、お手つだいも　うんと　するよ。」

ピノキオは、一生けんめい　おじいさんの　かん病を　しました。

朝　早く　おきて、近所の　うちへはたらきに　行きました。そして、牛にゅうを　買って　きて　おじいさんに　のませました。

ピノキオが　かん病したので　おじ

(新漢字　病　配　近　牛)

(032.JPG)

いさんは　ぐんぐん　元気に　なって　いきました。

ある　朝の　ことです。目を　さました　ピノキオは　おどろきました。へやの　中が、見ちがえるように　きれいになって　いました。

きのうまで　ねて　いた　おいしいさんが、おきて　仕事をして　いました。

あわてて　とびおきた　ピノキオは、もう　あやつり人形では　なくて、ほんとうの　子どもに　なって　いました。

「ああ　うれしい。おじいさん、ぼく　ほんとうの　子ども　に　なったよ。」

「おお　よかった　よかった。おまえが　いい　ことを　たくさん　したので、ほんとうの　子どもに　なれたんだよ。」

「おじいさん。どうして　何も　かも　こんなに　かわった
の。」
「それはね、子どもが　いい　子に　なれば　回りの　もの
も　みんな　りっぱに　なるんだよ。」
おじいさんは、ピノキオの　両手を　しっかりとにぎりし
めました。

くわしく　見て

1

(033. JPG)

先生の　する　ことを　見て、それを　文に　作る　けい
こを　しました。
「わたしの　する　ことを　よく　見て　いなさい。そして、
それを　おぼえて　おくのです。いいですか。」

そう　言って、先生は　次のような　ことを　しました。

①　つくえの　前に　立って

②　しばらく　わたしたちを　見て　いました。

③　いちばん　近い　まどの　所に　行って

④　まどを　半分　あけました。

⑤　また　つくえの　前に　もどって

⑥　つくえの　上の　日本語の　本を　取りました。

みんなは、先生の　する　ことを　注意して　見て　いました。順じょを　考えて、それを　文に　作りました。

書き終わってから　ひとりずつ　読みました。

先生は、その　人の　読む　とおりに　して　見せました。前の　番号の　③を　まちがえて　いると、いちばん　はなれた　まどへ　行きました。④の　半分が　ないと　まどを　全部　あけました。⑤を　わすれて　いると　いつ　までも

まどの　所に　立って　いました。⑥を　まちがえると、ほかの　本を　取りました。わずかな　ことでも、それを　文

（新漢字　語　号）

（034　JPG）

に　作るのは　むずかしい　ことだと　思いました。

2

先生の　つくえの　上の　花びんに、赤い　ダリヤが　さして　あります。先生が　それを　指さして、

「この　ダリヤを　よく　見て、しゃ生を　しましょう。絵に　かくのでは　なくて、ことばで　しゃ生を　するのです。」

と　言いました。はじめに、

「ダリヤが　あります。」

と、黒板に　書きました。中村君が

『先生の　つくえの　上に、』と　書き入れなければ　どこにあるのか　わかりません。」

と　言いました。石川さんが

「それだけでは、花びんに　さして　あるのか、どうか　わからないでしょう。」

と　言いました。

次々に　ことばが　ふえて　いきました。

1　ダリヤが　あります。

2　先生の　つくえの　上に、ダリヤが　あります。

3　先生の　つくえの　上に、花びんに　さした　ダリヤが　あります

4　先生の　つくえの　上に、青い　ガラスの　花びんに

（新漢字　指）

(035. JPG 挿絵あり)

さした、赤い ダリヤが 二本 あります。

文が、だんだん 長く なって きました。

長く なると 読みにくく なるので、こんどは いくつかに 切って、読みやすく 書く けいこを しました。

先生の つくえの 上に、青い もようの ついた ガラスの 花びんが あります。

その 花びんに、大きな 花と 小さな 花の 赤い ダリヤが 二本 さして あります。

いもばんの 作り方

きょうは、おもしろい いもばんの作り方を お話しましょう。

材料は、じゃがいも・さつまいも・にんじんなどです。

道具は、小刀・インキ・絵の具・紙・

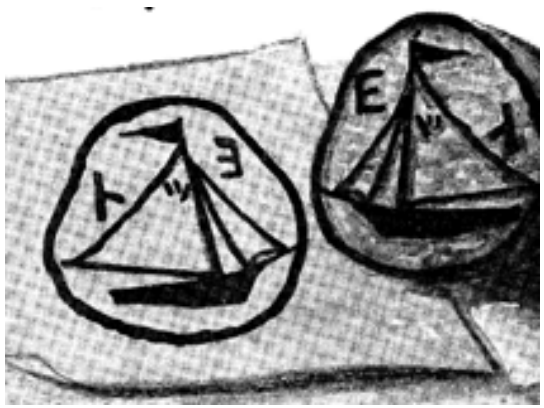
えんぴつなどが いります。

作り方

はじめに いもの はしを 平らに 切ります。それから、紙の 上に いもの 切り口を 当て、えんぴつで いもの形を かきます。

（新漢字 材 料 平）

（036. JPG）



その 中に、自分の ほりたいと 思う絵や 字を かきます。

その 絵や 字を、インキか 絵の具ではっきりさせます。

新聞紙を 五、六枚 重ね、その 上に、今 かいた 紙を おいて、いもの 切り口を 当て、強く おしつけると、いもの切り口に 絵や 字が うつります。

こんどは　小刀で　いもの　切り口を
ほります。ほり方には　絵や　字の　と
ころを　のこして　ほかの　ところを　ほ
る　やり方と、はんたいに　絵や
字の　ところを　ほる　やり方と
あります。
ほった　ところは　うつらないで、
のこした　ところが　うつるのです。
ほり終わったら、インキか　絵の具を　つけて　紙に　お
します。かたい　紙よりも、やわらかい　紙に　おす　方が
きれいに　うつります。
おして　みて　かすれて　いたり、形の　わるい　所は、
なおす　ことが　できます。ほりすぎた　ときは、もう一
度　はじめから、やりなおさなければ　いけません。
（新漢字　新　聞　強）

(037. JPG)

げんこう用紙の　書き方

げんこう用紙に　字を　書く　ときは、ますに　一字ずつ　きちんと　入れて　書きます。

点や　まるにも　ます目を　一つ　使います。

かぎや　かっこにも　ます目を　一つ　使います。

だいは　いち行目の　中ほどに　書きます。

書いた　人の　名まえは、二行目の　下の　方に、書きます。文の　書きはじめは、いちばん　上の　ます目を　一つ　あけて、二ばん目の　ます目から　書きます。

ことがらの　く切りが　ついたら、行を　かえて　書きます。

行を　かえる　ときも、いちばん　上の　ます目を　あけて、二ばん目の　ます目から　書きます。

会話には、はじめと　終わりに　かぎを　つけます。その

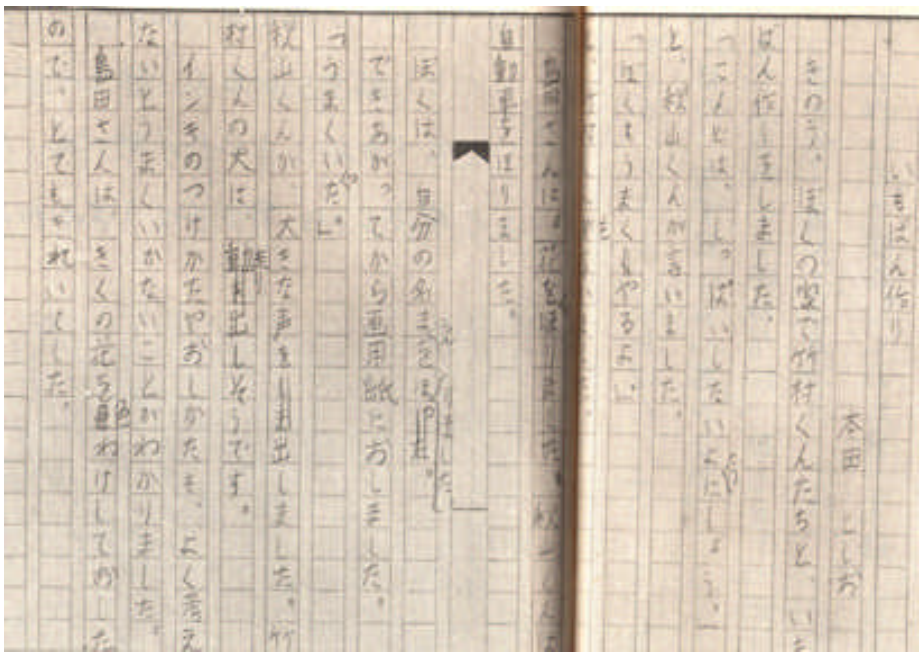
下には　つづけて　書きません。

かなが　つづいて　読みにくい　ところは、ことばの　切れめを　一ます　あけると　読みやすく　なります。

全部　書き終わったら、かならず　はじめから　読み返しましょう。書きおとした　ことは、ます目の　右がわに　書き入れます。そして、それが　どこに　はいるのか　よくわかるように　せんを　引いて　おきます。

書きまちがいは、きれいに　けして　書きなおします。

（新漢字　点　行）



(038. JPG)

けさないで　二本の　たてせんを　引いて、その　右がわに
書いても　いいのです。
ひつようで　ない　ことばが　あったら、それにも　二本
の　たてせんを　引いて　おきます。

(039. JPG　横書き)

野　ぎ　く

①　遠い　山から　ふいて　くる、
小寒い　風に　ゆれながら、
けだかく　きよく　におう　花。
きれいな　野ぎく　うすむらさきよ。

②　秋の　ひざしを　あびて　とぶ、
とんぼを　かるく　休ませて、
しずかに　さいた　野べの　花。

やさしい　野ぎく　うすむらさきよ。

(040. JPG　横書き)

文を　書く　ときは

○どんな　順じょで　書くか　文しょうの
組み立てを　考えてから　書きましょう。

○物の　形・色・動きなど　くわしく　思い出
して、その　ことを　順じょよく　書きま
しょう。

○く切り　く切りで、行を　かえて　書きま
しょう。

○ことばや　字に　気を　つけて、ただしく
書きましょう。

○知って　いる　かん字や　ならった　こと
ばを、できるだけ　使って　書きましょう

○まる・点・かざを　つけて、読みやすく

書きましょう。

書いた　あとでは

○書いた　あとでは、かならず　読み返してみましょう。

○まちがって　いる　ことばや　字を　なおしましょう。

○ひつような　ことばを　書きたしたり、いらない　ことばを　けずったりして、すじの　通った　文しょうに　しましょう。

○書きたいと　思った　ことが、読む人によく　わかるように　書けて　いるか　どうか　しらべましょう。

○まる・点・かぎが　ただしく　ついて　いるか　しらべましょう。

(041.ＪＰＧ)

【作文】「母の　日」の　相談

池　田　はるえ

もう　すぐ「母の　日」が　きます。

「母の　日」には、おかあさんに　何を　して　あげようか

と　きょうだいで　相談しました。

ねえさんは、

「おかあさんは、いつも　はたらいて　いるから、少し　らくに

して　あげたいわ。

と　言いました。にいさんは、

「ぼくも　お使いや　そうじを　して　手つだうよ。」

と　言いました。わたしが、

「みんなで　おこづかいを　出し合って、プレゼンテを　買いま

しょう。」

と　言うと、みんなが　さんせいして　くれました。プレゼ

ンテは　何が　いいか　相談しましたが、なかなか　きまり

ませんでした。

にいさんと　ねえさんが　まちに　行って、ししゅうの
はいった　きれいな　ブルーザを　買って　きました。おか
あさんは、前から　ほしがって　いたのですから、きっと
よろこぶと　思います。
いもうとは　みんなを　だいひょうして、おかあさんに
お礼の　ことばを　書く　ことに　しました。
（新漢字　母）

（042.　ＪＰＧ　左ＰＧ横書き、縦表記。）
ねえさんに、きれいな　カルトンを　買って　きて　もら
って、一生けんめい　書いて　います。
おかあさんは、まだ　何も　知りません。
わたしたちは、ときどき　顔を　見合わせると　くすくす
わらって　しまいます。
「母の　日」が　早く　くれば　いいと　思います。

日記と　手紙

1　日　記

4月1日　金曜日　　晴

きょうは、「4月ばか」の　日です。

朝、学校へ　出かける　とき、戸口で

「おかあさん、お客さまよ。」

と　言うと、おかあさんが　出て　きました。そして、

「あらっ。」

と　わらいながら　引っこみました。

午後、けんちゃんを　はいしゃに　つれて　いきました。

は　を　ぬく　とき、けんちゃんは　なきませんでした。

(043. JPG横書き、縦表記)

夜、しゅくだいを　しました。

4月5日　火曜日　　くもり

ミシが　子を　生みました。ニひきは、白と　黒の　まだらで、一ぴきは　三毛でした。

夕ごはんが　すんでから、わたしたちは　せいの　高さを　はかりました。

にいさんは　１メートル５４センチでした。もう　２センチで　おかあさんと　同じに　なります。

わたしは　１メートル３６センチで、去年　９月に　はかった　ときよりも　４センチ　高く　なって　いました。

けんちゃんは、９９センチで、もう　すぐ　１メートルです

４月１７日　日曜日　　雨

夕方まで　雨が　ふりました。

けんちゃんは　外へ　出られないので、いたずらを　して　しかられてばかり　いました。

夜　みんなで　さんぽに　出ました。

ファルマシアの　バランサで、からだの　おもさを　はかって　みました。

けんちゃんは　１８キロ、わたしは　２４キロ５００グラム、にいさんは　４２キロでした。

おかあさんは　はかりませんでした。

こうえんを　さんぽしました。

(044. JPG　横書き、縦表記)

４月２１日　木曜日　　晴

チラデンテスの　日で　学校は　お休みでした。

お昼すぎ、北村さんが　お話の　本を　返しに　来ました。

ふたりで、その　本に　書いて　ある　チラデンテスの　ことを　話しました。

チラデンテスの　名まえは　ジョアキン・ジョゼ・ダ・シルバ・シャビエル　いうのです。ブラジルを　どく立させようと　する　人々の、まっ先に　立って　はたらきました。その　ため、どく立を　よろこばない　人たちに　とらえられ、１７９２年４月２１日に　ころされたのです。

立

4月21日　木曜日　晴

チラデンテスの　日で　学校は　お休みでした。

お昼すぎ、北村さんが　お話の　本を　返しに　来ました。ふたりで、その　本に　書いて　ある　チラデンテスの　ことを　話しました。

チラデンテスの　名まえは　ジョアキン・ジョゼ・ダ・シルバ・シャビエルと　いうのです。ブラジルを　どく立させようと　する　人々の、まっ先に　立って　はたらきました。その　ため、どく立を　よろこばない　人たちに　とらえられ、1792年4月21日に　ころされたのです。

4月30日　土曜日　晴

来

学校から　かえると、おじさんが　来ていました。おじさんは、ブラジリアの　話を　聞かせて　くれました。

おとうさんは、来月　ブラジリアへ　行く　つもりなので、おじさんに　いろいろ　たずねて　いました。わたしが、

「行って　みたいなあ」と　言うと、おじさんは、

「向こうに　引っこすから、来年　冬休みに　なったら　あそびに　おいで。」

と　言いました。

夜　かげ絵を　しました。

4月30日　土曜日　晴

学校から　かえると、おじさんが　来ていました。おじさんは、ブラジリアの　話を　聞かせて　くれました。

おとうさんは、来月　ブラジリアへ　行く　つもりなので、おじさんに　いろいろ　たずねて　いました。わたしが、

「いって　みたいなあ」と　言うと、おじさんは、

「向こうに　引っこすから、来年　冬休みに　なったら　あ

そびに　おいで。」

と　言いました。

夜　かげ絵を　しました。

（新漢字　立　来）

（045.JPG）

二　アマゾンだより

はるえさん。元気ですか。ひこう場で　おわかれしてから十五日　たちました。

わたしは、ブラジリア、マナウスを　回って、おとといベレンに　来ました。

ブラジリアから　マナウスまでの　間、ひこうきから　見えるのは　マットばかりでした。マナウスから　ベレンまで、ひこうきは、アマゾン川の　上を　ひくく　とびました。川の　けしきが　おもしろいので　たいくつしませんでし

た。

ベレンは、アマゾン地方では　いちばん　大きな　町です。はく物かんと　水族かんへ　行って　めずらしい　ものを　たくさん　見ました。

アマゾン川は、世界一の　大きな　川です。町は　たいてい　川に　そって　います。そして、マットには　インジオが　たくさん　住んで　います。

こちらでは、どこへでも　ふねで　行きます。ふねを　家に　して、川の　上に　住んで　いる　人たちも　います。

アマゾン地方では、むかしから　ゴムが　たくさん　とれます。その　ほか、カスタニヤ、グアラナー、ジュッタ、ピ

（新漢字　物　界）

（046.　JPG　左PG　）

メンタ・ド・レイノなども　できます。ジュッタと　ピメンタ・ド・レイノは、日本人が　作り始めた　もので、今では

ブラジルの　大切な　さん物に　なって　います。

アマゾン地方は　年中　あついので、夜も　レーデで　ねる　人が　たくさん　います。昼でも、雨の　ふった　あとは　すずしい　風が　ふきます。

ベレンと　アマゾンの　えはがき

アマゾン川に　うかんで　いる　家

アマゾン川を　通る　船

わたしは、ベレンに　まだ　二しゅう間ぐらい　いる　つもりです。めずらしい　おみやげを　持って　かえります。楽しみに　して　まって　いらっしゃい。

五月二十一日　　父

はるえさん

ベレンと　アマゾンの　えはがき

（新漢字　父）

（047．ＪＰＧ）

三　はるえさんの　返事

おとうさん。

お手紙　ありがとう。

きのう　学校から　かえったら、おかあさんが、いい　もの

を　あげましょうと　いったので、何かと　思ったら　おとう

さんからの　手紙でした。うれしくて　何回も　読みました。

夕はんの　あとで　みんなにも　読んで　あげました。ベ

レンの　絵はがきは、学校の　お友だちにも　見せて　あげ

ました。はく物かんや　水族かんの　お話を　早く　聞きたいと　思います。

にいさんと　わたしは、もう　すぐ　しけんなので　一生けんめい　勉強して　います。

けんちゃんは、毎日、おとうさんは　いつ　かえって　来るのと　聞いて　います。

おとうさんが、ベレンに　いる　間に、この　手紙が　つくように　急いで　書きました。

おとうさん、早く　かえって　来て　ください。

おみやげを　楽しみに　して　まって　います。

五月二十八日　　はるえ

おとうさん

(048.ｊｐｇ)

アマゾンの　魚

はるえさんの　おとうさんが　アマゾンの　りょこうから　かえって　きました。
そして　ベレンの　務かんて　見た魚の　話を　して　くれました。
はるえさんは、どんな　魚なのか　もっと　よく　知りたいと　思いました。
北村さんと　学校の　としょ室に　行きました。
アマゾンの　魚の　ことが　書いて　ある　本は　すぐ　見つかりました。
本の　中には　カラーしゃしんも　たくさん　はいって　いました。
めずらしいのは、ペイシェ・ボイや　でん気うなぎです。ペイシェ・ボイは　小牛ぐらいの　大きさで、顔が　牛に　そっくりです。でん気うなぎに　さわると、馬で

も　たおれて　しまいます。

おそろしい　魚では、でん気うなぎの

ほかに　ピラニャと　いうのが　います。

ピラニャは、小さい　魚で　たくさん　集

まって　およいで　います。

（新漢字　魚）

（049.ｊｐｇ）

川に　動物が　おちると、よって　きて

あっと　いう　まに　食べて　しまいます。

色の　美しい　魚や、形の　おもしろい

魚は、たいてい　からだが　小さいようで

す。テトラ・ネオン、アカラ・バンディラ、

アカラ・ジスコなど、みんな　かわいくて

きれいです。こんな　魚は、だれでも　か

って　みたいと　思うでしょう。

はるえさんと　北村さんは、こんどの
日曜日に、水族かんへ　行く　やくそくを
しました。

サン・パウロ見物

この　間、ぼくたちは　先生に　つれられて、サン・パウロへ　行きました。

サン・パウロは、ブラジルで　いちばん　大きな　都会で、高い　たて物が　たくさん　あります。

州立ぎんこうの　たて物は、高さが　百六十一メートルもあって、上に　のぼると　まちが
ひと目に　見えます。

ぼくたちは、はじめに　イピランガの　はく物かんに　行きました。

（新漢字　見　都　州）

(050. jpg)

はく物かんの 前の 公園に
大きな どうぞうが たって
います。それは、ブラジルの
どく立を 記ねんして 作ら
れた ものです。
はく物かんでは、めずらしい
物を たくさん 見ました。れきしの 時間に ならった
物も ありました。

次に、イビラプエラ公園に 行きました。池や 林の あ
る 広い 公園です。この 公園は、サン・パウロが でき
てから 四百年目に 当たる 一千九百五十四年に 作られ
ました。
公園の 中には バンディラの
大きな 石の ぞうが あります。

また、市役所・体育かん・プラネタ
リオなどの　大きな　たて物が、あ
ちら　こちらに　たって　います。
　先生の　お話を　聞きながら、歩
いて　いる　うちに　日本かんに
来ました。コロニアが、サン・パウ
ロ市に　おくった　日本式の　たて物です。
　次の　日、ブタンタンへ　行く　と中に、いか大学と　病
（新漢字　公　園　市　体　育）

（051.ｊｐｇ）
いんが　ありました。
南米で　いちばん　りっぱな　大
学と　病いんだそうです。
　ブタンタン研究所は、こんもり
とした　森の　中に　ありました。

ここでは、どくへびなどに　かまれた　とき、注しゃする　くすりを　作って　います。入り口の近くに　コンクリートの　かこいが　あって、中に　いくつも　小さい　ポンがまのような　へびの　うちが　ありました。大小の　どくへびが　たくさん　いました。この　研究所は、世界一りっぱな　ものだ　そうです。

午後、プラッサ・ダ・セーから　ジレイタ通りを　見物し、ビアズット・ド・シャーを　わたりました。そこに、テアトロ・ムニシパルが　あります。それから　レプブリカ公園に　行きました。きれいな　店が　たくさん　ならんで　いて　人通りが　多く、にぎやかでした。

かえる　前の　日は、らん公園と

（新漢字　南　米　研　究）

（052．ｊｐｇ）

動物園を　見物して、コンゴニャスひこう場に　行きました。ゴーゴーと　大きな　音を　たてて、ひっきりなしに　ひこうきが　おりたり　とびたったりして　いました。

バンディラの　話

夕はんの　あとで、わたしは　サン・パウロ見物の　話をしました。イビラプエラ公園の　ことを　話して　いる　とき、おとうさんが

「大ぜいで　ふねを　引いて　いる　石ぞうが　あったが、あれは　何かね。」

と　言いました。わたしが、

「あれは　バンディラの　ぞうよ。」

と　言うと　にいさんが
「ハンディラって　何か　知って　いる。」
と　言いました。
「知って　いるわ。むかし、ブラジルで
たからさがしを　して　歩いた　人た
ちでしょう。」
と　言うと、
「まあ　そうだ。しかし　バンディラは、その　ほかに　も
っと　りっぱな　仕事を　したのだよ。」
と　言って、にいさんは　次のような　話を　しました。

(053. jpg)

むかし、ブラジルが　まだ　ポルトガルの　植民地で　あ
った　ころ、ポルトガル人たちは、セルトンに　たくさんの
たから物が　あるに　ちがいないと　思いました。
ゆう気の　ある　人たちは、ダイヤモンド・金・ぎんなど

を　見つけて、大金持ちに　なりたいと　考えました。

ところが、セルトンには　インジオや　おそろしい　けものが　たくさん　います。とても　五人や　十人では　行くことが　できません。そこで　何十人、何百人、多い　ときには　千人以上の　人が　たいを　作って　セルトンに　はいって　いきました。

たい長は　ポルトガル人でしたが、たい員には　マメルッコ・インジオ・黒人も　はいって　いました。

いろいろ　苦しい　目に　あいながら、何年も　たから物を　さがして　セルトンを　歩き回りました。

バンディランテの　中には、たから物を　見つけた　者もありましたが、何も　見つけないで、マットの　中で　死んで　しまった　者も　ありました。

ブラジルが、南アメリカで　いちばん　広い　国に　なったのは、こう　して　バンディラが　セルトンを　歩き回った　おかげです。

イビラプエラ公園に　ある　石ぞうは、バンデイラが　国を　広くした　ことを　記ねんして　作られた　ものです。

（新漢字　民　苦）

（054.ｊｐｇ）

先とうの　ふたりの　うち、ひとりは　たい長の　ポルトガル人で、ひとりは　道あんないの　インジオです。その　あとに　つづく　人たちは、ポルトガル人・インジオ・マメルッコ・黒人の　たい員です。

にいさんの　話が　終わると、おとうさんが、

「なるほど、あれが　バンデイラの　石ぞうか。ブラジルの国が　できるまでには、いろいろな　ことが　あった　わけだね。」

と、感心したように　言いました。

つるの　あやおり

むかし、おじいさんと　おばあさんが　くらしていました。
雪の　ふりつもった　ある　冬の　日でした。
おじいさんは、山へ　たき木を　取りに　行きました。
おじいさんが　たき木を　切って　いると、近くの　やぶから、かなしそうな　鳥の　鳴き声が　聞こえて　きました。
おじいさんは　どうした　ことかと　思って　行って　みました。
見ると、一わの　大きな　つるが、わなに　かかって　いました。つるは、はねを　バタバタさせて　もがいて　いました。

（新漢字　感　雪　鳥）

（055.jpg）

「おお　おお、かわいそうに。」
した。

おじいさんは、急いで　わなを
はずして　やりました。
　つるは、じっと　おじいさんの
顔を　見て　いましたが、うれし
そうに　コーコーと　ないて、空
高く　とんで　いきました。
　おじいさんは　うちに　かえって、おばあさんに　その
ことを　話しました。おばあさんは、
「それは　それは、いい　ことを　なさいましたね。」
と　言って、よろこびました。
　その　ばん、表の　戸を　トントンと　たたく　者が　あ
りました。おばあさんが、戸を　あけて　みると、ひとりの
むすめが　しょんぼり　立って　いました。
　おばあさんは　びっくりして、
「まあ　まあ、この　寒い　雪の
　ばんに、いったい　どうしたの。」

と　たずねました。

「わたしは、旅の　者ですが　道に

まよって　こまって　います。ど

うか　ひどぼん　とめて　ください。」

（新漢字　表　旅）

（056.ｊｐｇ）

「それは　かわいそうに、さあ　さあ　おはいり。」

おじいさんと　おばあさんは、むすめを　いろりの　そば

に　すわらせ、あたたかい　ごはんを　食べさせました。

「名まえは　何と　言うの。」

「つると　言います。」
「おとうさんや　おかあさんは　どうしたの。」
「父も　母も　とっくに　なくなりました。」
「それでは　ひとりぼっちなの。」
「はい。」
おじいさんと　おばあさんは、ねどこを　作って　おつるを
ねかせて　やりました。
次の　日も、また　次の　日も、
雪は　ふりつづきました。
おじいさんと　おばあさんは、
こんな　雪の　日に、旅を　す
るのは　むりだと　言って、お
つるを　引きとめました。
おつるは　たいそう　美しく、
心の　やさしい　むすめでした。
おじいさんと　おばあさんは、

おつるを　いつまでも　うちに
おきたいと　思いました。

(057.ｊｐｇ)

「いっそ、うちの　むすめに　なって　おくれ。」
と　言うと、おつるは、
「はい。どうか　いつまでも　お
そばに　おいて　ください。」
と　うれしそうに　こたえました。
こう　して　おつるは、おじい
さんと　おばあさんの　むすめに
なり、楽しく　くらして　いまし
た。
ある　日の　ことでした。
おつるは　おじいさんに、
「わたしは、ぬのを　おる　ことを　知って　います。どう

か　糸を　買って　きて　ください。」

と　たのみました。

おじいさんが　糸を　買って　くると、おつるは、

「これから　わたしは　ぬのを　おります。その　間、わたしの　へやを　けっして　のぞいては　いけません。」

と　言って、へやに　はいりました。

キリキリトンカラ　キリキリトン

キリキリトンカラ　キリキリトン

おつるの　へやからは、一日中　ぬのを　おる　音がにぎやかに、聞こえて　きました。

(058.jpg)

三日　たちました。おつるは、おりあがった　ぬのを　持って、へやから　出て　きました。

「これは、めずらしい　あやおりの　ぬのですから、きっと　高く　売れると　思います。」

と　言いました。

今までに　見た　ことも　ない　美しい　ぬのでした。おじいさんは、あやおりを　持って、とのさまの　所へ　行きました。

とのさまは、

「こんな　めずらしい　ぬのは　見た　ことが　ない。」

と　言って、びっくりするほど　高い　ねだんで　買ってくれました。

おじいさんは、大よろこびで　かえって　きました。

あやおりが　高く　売れた　ことを　聞くと、おばあさんもたいそう　よろこびました。おつるは、

「それでは、あしたから　また　ぬのを　おりましょう。どうか、わたしの　へやを　のぞかないで　ください。」

と　言って、へやに　はいりました。

キリキリトンカラ　キリキリトン

キリキリトンカラ　キリキリトン

おじいさんと　おばあさんは、あの　美しい　ぬのを、どう　やって　おるのか、それが　見たくて　たまりませんでした。でも、見ないで　ください　と　言われて　いるので、じっと　がまんして　いました。

(059.ｊｐｇ)

三日目の　夕方に　なりました。もう　できあがる　ころだろうと、ふたりは　おつるの　へやの　そばへ　行きました。

耳を　すませて　聞くと、ぬのを　おりながら、

「もう　すぐ　できます。できたなら、また　とのさまに　売りましょう。」

と　うたって　いる　おつるの　声が　聞こえました。ふた

りは、いよいよ　がまんが　できなく　なりました。
そっと　戸の　すきまから　のぞきました。
ぬのを　おって　いたのは、
おつるでは　ありませんでした。
一わの　つるでした。
つるは、くちばしで　むねの
はねを　ぬいては　糸に　まぜ
ながら、一生けんめい　おって
いました。
ふたりは　思わず

(060. jpg)

「あっ。」
と　さけびました。その　声を　聞くと、つるは　もとの
美しい　おつるの　すがたに　かわりました。そして、声を
はり上げて　なきました。

「わるかった、わるかった。わたしが　わるかった。」
ふたりは　おつるの　せなかを　なでながら　あやまりました。おつるは、
「わたしは、いつか　おじいさんに　助けて　いただいた
つるで　ございます。ごおん返しが　したかったのです。
でも、ほんとうの　すがたを　見られては、もう　おそばで　くらす　ことは　できません。」
「いや　いや、お前は　うちの　むすめだ。けっして　どこへも　行っては　いけない。」
おじいさんと　おばあさんは、なきながら　おつるの　手をしっかりと　にぎりました。
「いいえ　いいえ。もう　おわかれしなければ　ならないのです。さようなら　さようなら。」
と　言うと、おつるの　すがたは　つるに　かわりました。
つばさを　大きく　ひろげ、にわへ　とび出しました。
「まって　おくれ、おつる。まって　おくれ。」

ふたりは　追いかけました。

つるは　さっと　とびたち、夕空に　まい上がりました。

(061.ｊｐｇ　右ｐｇのみ　)

かなしそうな　声で　コー　コーと　なきながら、遠く

遠く　とんで　いって　しまいました。

(066. jpg 右pg 横書き)

先生と父母へ

この教科書は、今までに学習してきた「読む」「書く」「話す」力を円満に伸ばしながら、「日本語(4)に続いて「読解力」をさらに高め、あわせて「作文能力」を養うことに留意して編集しました。

学習の進展にともない、日本語についての意欲もさかんになってくるので、自己中心的なもののほかに、社会的なもの、知的なものへと題材を広げていきました。

文章　生活文のほかに、説明文や日記文を入れ、修飾句や慣用句のはいった複雑な文章も取り上げました。この巻にはじめて敬語を取り入れ、その使い方を理解させるようにしました。

語い・文字　語いは基本的な日常語を中心に、社会生活に必要な語いを提出し、漢字は、日常使用度数や画数の難易を考えて、提出しました。ポ語その他の表記については、かたかなを使用し、かたかなの複習もできるようにしました。

内容の　あらまし　社会科にぞくするようなものとしては、「みんなでなか
よく」「ぼくたちの村」「日記と手紙」「サン・パウロ見物」「バンデイラの話」な
どがあり、理科的なものとしては「花だん作り」「アマゾンの魚」童話として
は「ピノキオ」「つるのあやおり」などを掲げました。

内　容　に　つ　い　て

4～22　　みんなで　なかよく「一　教室のそうじ」では学級融和の精神を読みとらせ「二　相談会」では討議の仕方を教え、「三　花だん作り」では協力の尊さ　および共同作業の楽しさを読みとらせ、植物についての知識を広めさせたい。

新出文字、読替文字、抽象語いは特に適切な指導が必要である。「いらっしゃいました」「おっしゃって」「行かれました」「くださいました」など　の敬語を理解させる。

23　　いもうと　生活の中の一こまを取り上げた詩である。生活の中から取材した簡単な詩を作らせ、詩を作る興味をおこさせたい。

24～25　　話し合いを　する　ときは、話を　する　ときは　話し合いにおける話し方の技術や態度について教える。

26～58　　おもしろい　ことば　日本語の特長ともいわれる畳語に関心を持たせ、その

(065. ｊｐｇ　左ｐｇのみ，横書き)

性格を理解させ、ことばに興味を持たせる。ここに提出した短文が常体である　ことに気付かせる。

29～46　　ぼくたちの　村　入植以来の村の形成と経過についてごく一般的なものをあげて説明し、理解させようとしたものである。「一　バイネイラの　下で）　は村の外形からはいって入植当時の様子を理解させ、「二　大切な村のもの」

では村にある公共施設や　村の行事を理解させ、進んではそれに村にて、協力する態度を養いたい。「三　村の入植祭」では楽しい人植祭をの情景を読みとらせ、「四　村を作った　人」では、村のためにつくし

た人の労苦を読み取らせ、その人たちに対する態度を教えたい。これらを通して、入植に関する(解読不能)いを広め、さらに各自の町村に対する関心を深めさせたい。

47～61　ピノキオ　長文の読み物として、ピノキオを取り上げ、広く世界の昔話に興味を持たせたい。教科書以外の読み物も長文のものを読むように導く。

読んだものについては、感想がのべられる程度に読みを深めるよう、お話リレーなどにより、話し方の発表をさせたい。会話文になれさせ、の、ぞ、だな、なあ、だよ、なの、などの終助詞の表現法を教える。

61～66　くわしく　見て　1では見たままを文に書く　ときのむずかしさを理解させ、2では　くわしく見る見方について理解させ、ことばによる写生に興味を持たせる。

67～69　いもばんの　作り方　説明文の理解力を養い、いもばん作りを実践させる。

70～72　げんこう用紙の　書き方　本文により原稿用紙の書き方を教え、「いもばん　作り」の作文により実際と照合し、理解を深め、実際に原稿用紙に書かせる。

72～73　いもばん作り　原稿用紙について、書き方、なおし方、のぞき方を教える。

74～75　野ぎく　唱歌「野ぎく」の詩である。秋の情景を読みとらせ、詩の表現法になれさせる。

76～77　文を　書く　ときは、書いた　あとでは　文を書くときと、書いた後での、技能と態度について教える。書いた後では添削する習慣を養う。

78～80　「母の　日」の　そうだん　作文指導では、ときどき個々の作文について、意味のわからない所や、表現の不十分な所を指摘して、指導する。語いや語法の習得には、なるべく多くの具体例を取り上げて指導したい。「母の日」についての意義を教え、その日について、話し合いをさせたい。

81～91　日記と　手紙　簡潔で要点を落とさない書き方を生活日記と

手紙の中から読　みとらせる。日記や手紙を喜んで書く習慣を養いたい。

92～94　アマゾンの　魚　魚類の知識を広め研究心を高めさせる。

95～100　サン・パウロ見物　日本語（3）にあるサン・パウロから一歩を進め、同地を見学した作文から、情景を読みとらせ、見学記の書き方を教える。

100～104　バンディラの　話　サン・パウロ見物の話に続き、にいさんが教えてくれたバンディラの話である。内容を読みとらせ、歴史に興味を持たせる。かたかな　表記の言葉が多いので、かたかなの復習もさせたい。

105～118　つるの　あやおり　つるの恩返しとか、夕鶴とか言われている物語で、日本　的長編童話として取り上げたものである。読書意欲を増大させ、読書力を伸ば　していきたい。理解しにくいことばは適当な助言を与えて指導してほしい。短かく区切って内容をまとめる練習をさせ、紙芝居などに発展させたい。

「なさいました」「ください」「なくなりました」「くださいました」「いただいた」「ございます」「ごおん」「おわかれ」などの敬語を理解させる。

ページ	ことば
85	来月
	つもり
	引っこす
	来年
	かげ絵
86	おどどい
	けしき
	たいくつ
87	地方
	はく物かん
	水族かん
	世界一
	そって（沿う）
88	さん物
	年中
	いらっしゃい
90	絵はがき
	しけん
92	りょこう
93	カラーしゃしん
	でん気うなぎ
	小牛
	そっくり
	おそろしい
94	やくそく
95	つれられ（つれられる）
	郷会
	州立ぎんこう
96	どうぞう
	記ねんして
	れきし
	……目（何年目）
97	ぞう（像）
	市役所
	体育かん
	日本式
	いか大学
	病いん
98	南米
	研究所
	こんもり
	どくへび
	かまれた（かまれる）
	くすり
	かこい
	へび
99	人通り
100	とびたったり（とびたつ）
	石ぞう（石像）
101	たからさがし
102	植民地
	ざん（銀）
	けもの
	たい（豚）
	たい長
	たい員
103	黒人
	苦しい
	南アメリカ
	おかげ
104	先どう
	道あんない
	愚心
105	つる（鶴）
	あやおり
	雪
	たき木
	やぶ
	かなしそうな
	もがいて（もがく）
106	はずして（はずす）
	それはそれは
	なさい
107	表（おもて）
	しょんぼり
	いったい
	旅
	まよって（まよう）
	どうか
	とめて（泊める）
108	いろり
	あたたかい
	食べさせ
	どっくに
	なくなり（亡くなる）
	ねどこ
109	ふりつづき（降る）
	むり（無理）
	引きとめ
110	いっそ
	おそば（側）
	こたえ（答える）
111	ぬの（布）
	おる（織る）
	知って（知る）
	のぞいて（覗く）
112	ねだん
114	すませて（済ます）
115	すきま
	思わず
116	あやまり（あやまる）
	ございます
	ごおん返し
	見られて（見られる）
117	さっと
	まい上がり（舞い上がる）

ページ	ことば
29	波がた
	ざっ作地
	あちこち
	ところどころ
	かわら屋根
	中ほど
30	そうこ
	れんが工場
	北がわ
	せいさい所
	家族
	日本人
	へん（辺）
31	運んで（運む）
	小屋
	命がけ
	切りたおし
	（切りたおす）
	年より
	まっ黒
32	近ごろ
	以上
	へった（減る）
33	番人
	つらい
	むかし話
	大切
	過って（過る）
34	土かべ
35	入植祭
	えんげい会
	何台
	品物
36	お祭り
	近く
	運動場
	すごし（過ごす）
	役
37	毎年

ページ	ことば
38	式
	じゅんび
	国歌
39	だん（壇）
	記ねん品
	おくり（贈る）
	つつみ（包）
	おじぎ
40	もどり（もどる）
	晴れた
	買い物きょうそう
	おかしかった
	（おかしい）
	大わらい
	立ちあがって
	（立ちあがる）
	おうえん
41	げき
	おそく（おそい）
	たっしゃ
42	ひげ
	びっこ
	つえ（杖）
	ながめて
	（ながめる）
43	先に（さきに）
	入植
44	しも（霜）
	くらし（暮らし）
	ようけい
	山火事
	けし（消す）
	大けが
	弱く（弱い）
45	むすこ
	大学
	そつぎょう
	つとめて
	（つとめる）

ページ	ことば
	よそ（他所）
	まかせて
	（まかせる）
46	おん人（恩人）
	いたわって
	（いたわる）
47	いたずら
	木切れ
	あやつり人形
	いきなり
	毛
	引っぱり（引っぱる）
	へや中
	かけ回り
	（かけ回る）
	戸口
48	おもしろがって
	（おもしろがる）
	運（うん）
	おまわりさん
	お礼
	だまって（だまる）
49	着て（着る）
	だいじそう
50	薬たい
	しばい小屋
	さかん（盛ん）
51	しばい
	ぶたい
	なかま
52	薬屋
	かついで（かつぐ）
	人形使い
	こんな
	かえり道
	のせた（乗せる）
53	馬車
	ぎょ者
54	すべり台

ページ	ことば
54	まめ自動車
	木馬
	どころが
	かがみ
55	ろば
56	馬小屋
	ろば使い
	むち
	合図
57	かけ出し
	（かけ出す）
	くぐりぬけ
	（くぐりぬける）
	うしろ足
	売ってしまえ
	たいこ屋
	はいで（はぐ）
	たいこ
	つきおとし
	（突き落とす）
58	引き上げて
	（引き上げる）
	にげ出し
59	ごめん
	かん病
	牛にゅう
	のませ（飲ませる）
60	へや（部屋）
	見ちがえる
61	何もかも
	かわった（変わる）
	にぎりしめ
	（にぎりしめる）
63	日本語
	番号
	わずかな
64	指さして（指さす）
	しゃ生
	書き入れ

ページ	ことば
66	読みにくく
	（読みにくい）
	読みやすく
	（読みやすい）
	もよう
67	いもばん
	材料
	じゃがいも
	にんじん
	小刀
	いります（要る）
	平ら
	切り口
68	新聞紙
	おしつける
69	やり方
	かすれて
	（かすれる）
	なおす（直す）
	やりなおさなければ
	（やり直す）
70	げんこう用紙
	ます目
	かぎ
	かっこ
	だい（題）
	ことがら
	く切り
	行（ぎょう）
	かえて（代える）
71	会話
	切れめ
	読み返し（読み返す）
	書きおとし
	（書きおとす）
	せん（線）
72	ひつよう
	たてせん
74	ひざし

ページ	ことば
	とんぼ
	かるく（軽く）
	野べ
75	ふいて（吹く）
	小寒い
	けだかく
	（けだかい）
	きよく（清く）
	におう（匂う）
	野ざく
	うすむらさき
76	文しょう
	組み立て
	色
	……など
	ただしく
77	書きたし
	（書きたす）
	しらべ（しらべる）
78	作文
	母の日
	らく（楽）
79	おこづかい
	ししゅう
	だいひょう
81	四月ばか
	はいしゃ
	ぬく（抜く）
82	しゅくだい
	くもり
	まだら
	三毛（みけ）
	夕ごはん
84	こうえん（公園）
	どく立
	とらえられ
	（とらえられる）
	ころされ
	（ころされる）

おもな　ことば

ページ	ことば
4	学年（がくねん）
	当番（とうばん）
	生徒
	分けて（分ける）
	まぜて（まぜる）
5	一組（ひとくみ）
	人数（にんずう）
	まちまち
	男女（だんじょ）
	なるべく
	くじ引き
	順番
6	見合わせ
7	さんせい
	パチパチ
	たたき（叩く）
	重い
	動かし（動かす）
	ゆか（床）
	はいたり（掃く）
	ふいたり（拭く）
8	ごくろうさま
	そうじ道具
	かたづけ（かたづける）
9	相談会
	ぎ長
	ふくぎ長
	ならべかえ
	せき（席）
	ついて（就いて）
	さいしょ
10	南がわ
	あいて（空く）
11	すきな（好く）
	かってに
	注意
	どう
12	きょうそう
	しないで（する）
	組長
	えらんで（選ぶ）
	全員
	組ごと
13	組み分け
14	道具
7	まとめて（まとめる）
	ゆるし
	受けて（受ける）
	もらい（もらう）
18	花だん作り
	なえ
	二組（ふたくみ）
19	けずる
	ごみ
	ごみすて場
	はこぶ
	ごくろう
20	かたくて（かたい）
	こうたい
	おっしゃいました
	かわろう（かわる）
	まだ
21	うらにわ
	行かれました
	がんばって（がんばる）
	物音（ものおと）
	土ならし
	あじさい
	きく（菊）
	けいどう
	百日草
	まつばぼたん
22	できあがった（できあがる）
23	ぱっちり
24	ひと
	うち
	ゆずり合って（ゆずり合う）
	助け合って（助け合う）
	とおりに
25	ことばづかい
	場
	心持ち
26	重なって（かさなる）
	パラパラ
	ふり出し（ふり出す）
	すず（鈴）
	戸
27	風車
	回る
	ゆらゆら
	ゆれる
	するする
	のぼる
	もんだい
	むずかしい
28	ますます
	人々
	わらった（わらう）
29	見わたす
	ゆるい

(4)

来	久	話	言	当	図	画	用	紙	度
返	事	家	草	葉	安	心	向	朝	持
西	多	去	聞	時	近	東	京	場	海
所	文	読	次	記	間	黄	池	王	島
根	同	血	止	道	考	屋	絵	店	米
売	買	取	明	戸	仕	原	楽	門	全
工	美	使	春	刀	雲				

39 大谷さん	39 記ねん品	40 晴れ	40 石けん	41 七十八才	43 仕事	44 世話	44 後	44 弱く	45 死んで	47 人形
47 両手	48 追いかけ	48 お礼	49 着て	53 馬車	53 ぎょ者	54 食べ	57 皮	58 病気	58 心配	59 近所
59 牛にゅう	63 日本語	63 番号	64 指さし	67 材料	67 平ら	68 新聞紙	68 強く	70 点	70 一行目	78 母
84 どく立	85 来月	87 はく物かん	87 世界一	88 父	92 魚	95 見物	95 都会	95 州立一	96 公園	97 市役所
97 体育かん	98 南米	98 研究	102 植民地	103 苦しい	104 感心	105 雪	105 鳥	107 表	107 旅	

今までに ならった かんじ

(1) 一 日 足 二 小 中 三 木 牛 四 下 人 五 川 六 大 七 上 八 月 九 子 十 手

(2) 石 目 本 方 耳 火 出 左 白 水 右 立 赤 女 金 青 光 犬 土 外 入 口 見 山 夕 声 走 力

(3) 行 天 空 貝 夜 何 古 秋 田 気 広 早 組 百 玉 南 先 車 花 虫 村 国 毛 野 生 歩 汽 少 会 名 切 北 年 半 長 知 馬 書 友 森 学 分 夏 林 品 形 男 自 校 平 冬 元 町 竹 地 正 音 回 高 風 黒 毎 神 合 前 糸 作 色 思 今 雨 字 休 台 千 引 太

あたらしい　かんじ

一の　しるしは　前に　ほかの
読み方で　出た　もの

4 教室	4 新しい	4 始まり	4 当番	4 生徒	4 分けて	5 人数	5 相談	5 男女	5 方角	5 順番
6 山下君	6 宮川さん	6 顔	6 花だん	7 重い	7 物	7 動かし	8 道具	9 ざ長	9 黒板	10 植える
11 注意	12 全員	13 曜	14 午後	15 終わり	17 受けて	18 昼ごはん	18 集まり	18 この間	19 者	21 百日草
23 歌	24 助け	25 心持ち	26 重なって	27 星	28 寒く	28 方々	28 乗った	29 波が	29 遠く	30 工場
30 家族	30 日本人	31 進んで	31 住み	31 命がけ	31 畑	32 以上	33 守って	33 楽しい	33 大切	33 通って
34 勉強	34 全部	35 入植祭	35 一回	36 お祭り	36 運動場	36 役にたつ	37 急いで	38 式	38 国歌	38 客

元文部省図書監修官
監修　林　実　元（在東京）
編集執筆（ABC順）
古野菊生
二木秀人
加藤千重子
岡崎親
坂田忠夫
武本由夫
表紙・挿絵（ABC順）
星ルリ子
星弘
半田知雄
石川剛
尾形菊枝
高岡由也
玉城卓治
土屋韶
山田レイ
渡辺優

日本語（5）

一九六〇年十二月十五日　印刷
一九六一年一月一日　発行
一九六一年五月二十日　再版
定価

著作者　日伯文化普及会
日本語教科書刊行委員会
発行者　日伯文化普及会
ブラジル、サン・パウロ市、
サン・ジョアキン街三八一
印刷者　東京都千代田区神田神保町三ノ二九
株式会社　帝国書院
代表者　守屋紀美雄
発行所　日伯文化普及会
ブラジル、サン・パウロ市、
サン・ジョアキン街三八一